

2013年度

大学院シラバス

薬学研究科



摂南大学大学院

薬学 研究科

Graduate School of Pharmaceutical Sciences

医療薬学専攻

Division of Pharmaceutical Sciences

大学院での学びについて

学長 今井 光規

摂南大学は、「教育の理念」に掲げていますように、人間力、実践力、統合力を兼ね備えた自律的な人材の育成を使命としています。現代社会は、人類の存続をも脅かす多くの問題を抱えています。それらを克服し持続可能な社会を築いていかなければなりません。摂南大学のタグライン“Smart and Human”は、このような課題に対する大学としての取り組みの方向性を示すものです。

本学は、5大学院研究科を設置しています。すなわち、薬学研究科（博士課程1専攻）、工学研究科（博士前期課程3専攻・博士後期課程1専攻）、経営情報学研究科（博士前期・後期課程1専攻）、法学研究科（修士課程1専攻）、国際言語文化研究科（修士課程1専攻）です。

学校教育法（99条1項）において、大学院は「学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度な専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする」と定められています。本学大学院で学ぶ皆さんは、この目的を常に念頭におき、主体的に学修に励むとともに人間的成長を遂げるよう、研鑽に努めてください。

今日わが国は、急速なグローバル化と情報化に加え、世界に例を見ない少子高齢化と人口減少など、大規模な変化に直面しています。このような状況のなかで大学院に学ぶ皆さんには、先人の知恵に学びながらも旧来の考えに囚われることなく、イノベーション創出を目指し、人類の直面する課題の解決に向けて、社会に貢献することが期待されています。

皆さんは、高度な専門知識を修得するとともに、人間として欠かせない高い倫理観と豊かな人間性を備えるよう人格形成に努め、わが国と世界の将来を担う人材として、専門知識と自らの人格を統合する自己陶冶の使命を帯びています。本学教職員は、皆さんの大学院での学びの目的が達成されるよう、あらゆる側面でサポートします。

学術研究は、どの分野にあっても厳しいものです。本学で学ぶ皆さんが、学内だけでなく、地域や世界の人々との多様な研究交流を通して、その険しさと喜びを味わいながら、有意義な大学院生活を送られることをお祈りしています。

薬学研究科の教育目標とカリキュラム編成方針

薬学研究科医療薬学専攻では、医療現場での臨床的課題等を対象とする研究を通して薬学分野の高度な知識・技能・態度を修得し、高度な医療に応えることができる優れた研究能力を有する薬学研究者及び薬剤師等を育成することを目的とする。

本専攻では、「臨床薬学」「健康薬学」「医薬品開発学」の3つの分野で教育課程を構成し、いずれかの分野に重点を置いた医療薬学の全般的な専門知識を統合的、体系的に修得させる。また、各分野の専門知識を深めるために、それぞれに演習科目（「臨床薬学演習」「健康薬学演習」「医薬品開発学演習」の3科目）を設置する。

① 臨床薬学分野

臨床薬学の分野では、臨床の場での課題を見つけ、解決するための知識・技能を教授する。そのために、学内での演習に加えて必要に応じた医療機関での臨床薬学の実地演習（カンファレンスへの参加等）を実施する。

② 健康薬学分野

健康薬学の分野では、国民の健康長寿への社会的要請を背景にして、患者以外にも、広範な人々の未病、予防や健康の維持・増進・回復及び生活の質の改善において指導的な役割を果たす高度専門医療人を養成することを念頭に、環境保健、疾病予防、健康教育・管理、衛生行政、医療制度、社会保障等の実際を教授する。

③ 医薬品開発学分野

医薬品開発学の分野では、ヒトに対する最も有効かつ安全な医薬品及びその投与システムを開発するため必要な理論・知識・技能を教授する。

④ 各分野共通（特別研究）

各分野共通として、「医療薬学特別研究」を設ける。これは全学年を通じた研究活動により博士論文をまとめるための必修科目とする。

授業(指導)計画の記載内容の凡例

授業(指導)計画は、以下の項目に沿って記載しています。

1. 科目名等 全授業(指導)科目名に英文名を併記した。
対象となる年次、開講学期、単位数、担当者の氏名を順に記載した。
2. 授業(指導)概要・目的 授業(指導)全体の概要、各研究科の教育目的に基づいた位置付けを記載した。
3. 到達目標 授業(指導)の目的とする到達目標について、できるだけ具体的に記載した。
4. 指導方法と留意点 授業の進め方や予習・復習の指示、課題やレポートの指示等を記載した。
5. 授業(指導)計画 授業(指導)内容が分かるように、原則として授業(指導)テーマ、内容・方法等を記載した。
6. 評価基準 成績評価の方法について、できるだけ具体的に記載した。
7. 教材等 授業(指導)で使用する教材について記載した。

目 次
＜医療薬学専攻＞

臨床薬学分野

臨床分析学特論	1
臨床生化学特論	2
臨床病態学特論	3
臨床症候学特論	4
臨床薬理学特論	5
薬物療法学特論	6
医薬品管理学特論	7
臨床漢方医療薬学特論	8
精神医療薬学特論	9
臨床薬学演習	10

健康薬学分野

公衆衛生学特論	11
食品安全学特論	12
感染予防医療薬学特論	13
健康薬学演習	14

医薬品開発学分野

医薬品化学特論	15
製剤学特論	16
薬物動態学特論	17
臨床統計学特論	18
医薬品開発学演習	19

各分野共通

医療薬学特別研究	20
----------	----

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床分析学特論 Advanced Clinical Analysis	1	後期	2	アキサワトシフミ、コシモトミ 秋澤 俊史、小西 元美
【 授業概要・目的 】 本特論では、分析化学の原理を踏まえて、臨床現場で実際に使用されている分析機器並びに診断方法の理論と実際について論じる。具体的には、C T、P E T、M R I、内視鏡など、最新画像診断機器の原理と画像解析の基本的な考え方を理解させる。また、遺伝子診断法の原理と方法を教授したうえで、遺伝子診断の有用性や今後の展望、さらに倫理的問題点について論じる。加えて、臨床現場で使用されている診断機器と基礎研究との関連を理解させる。				
【 到達目標 】 医療現場で使用されている最新の診断機器の原理を理解し、基礎研究への応用ができるようになることを目標とする。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式およびセミナー形式で行なうので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	ELISA を用いた臨床分析 (小西)	ELISA の原理		
2	ELISA を用いた臨床分析 (小西)	ELISA を用いた分析		
3	質量分析装置を用いた臨床分析 (小西)	質量分析装置の原理		
4	質量分析装置を用いた臨床分析 (小西)	MARDI を用いた分析		
5	質量分析装置を用いた臨床分析 (小西)	LC-MS による分析		
6	NMR を用いた臨床分析 (小西)	NMR の原理		
7	NMR を用いた臨床分析 (小西)	NMR を用いた低分子化合物の立体構造解析		
8	NMR を用いた臨床分析 (秋澤)	NMR を用いたペプチド・タンパク質の立体構造解析		
9	PET を用いた臨床分析 (秋澤)	PET の原理		
10	PET を用いた臨床分析 (秋澤)	PET 用診断薬の開発		
11	PET を用いた臨床分析 (秋澤)	PET 用診断薬の開発		
12	医薬品開発を目指した基礎研究 (秋澤)	医薬品シーズの検索		
13	医薬品開発を目指した基礎研究 (秋澤)	活性化化合物の分離・精製・構造解析		
14	医薬品開発を目指した基礎研究 (秋澤)	構造 - 活性相関		
15	医薬品開発を目指した基礎研究 (秋澤)	活性化化合物の血中濃度の測定		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度により評価する。				
【 教 材 等 】 薬剤師に必要な臨床機器分析 (廣川書店、4000円)			【 備考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床生化学特論 Advanced Clinical Biochemistry	1	後期	2	オツカ マサト、タケウチ ケンジ 大塚 正人、竹内 健治
【 授業概要・目的 】 本特論では、生化学の原理を踏まえて、臨床における生化学・栄養学の理論と実際について論じる。各種代謝異常等による病態を理解させ、その最新治療法の実際について論じる。また、臨床栄養学分野の最新情報の収集と理解を通して、効果的な薬物療法への寄与等について論じる。				
【 到達目標 】 最新の臨床生化学の実態を理解して、考察することが出来る。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式及びセミナー形式で行うので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	構造生物学と医療（大塚）	構造生物学の手法と医療への応用		
2	薬物輸送体の生化学（大塚）	薬物輸送体の構造と機能について		
3	代謝異常による病気Ⅰ（大塚）	代謝異常による病態についてⅠ		
4	代謝異常による病気Ⅱ（大塚）	代謝異常による病態についてⅡ		
5	老化と病態Ⅰ（大塚）	老化による様々な病態についてⅠ		
6	老化と病態Ⅱ（大塚）	老化による様々な病態についてⅡ		
7	生体防御と感染症（大塚）	免疫及びアレルギー疾患について		
8	遺伝子治療（大塚）	遺伝子診断とオーダーメイド医療について		
9	がんの本質（竹内）	がんとはどういうものなのかについて		
10	腫瘍ウイルス（竹内）	腫瘍ウイルスはどのようにがんを引き起こすのかについて		
11	細胞性がん遺伝子（竹内）	細胞性がん遺伝子によるがん化について		
12	がん抑制遺伝子（竹内）	がん抑制遺伝子の不活化によるがん形成について		
13	増殖因子、増殖因子受容体とがん（竹内）	がん化の原因としての、増殖因子受容体の恒常的活性化について		
14	細胞内シグナル伝達とがん（竹内）	がん化の原因としての、細胞内シグナル伝達の増強について		
15	がんの標的治療（竹内）	臨床で使用されている標的治療薬による抗がん作用の分子機構について		
【 評価基準 】 受講態度及び課題達成度をレポート課題等を通じて総合的に判断する。				
【 教 材 等 】 (参考書) リッピンコットシリーズ イラストレイテッド 生化学 原書4版 発行元：丸善出版 8,000円＋税、ワインバーグがんの生物学 武藤誠・青木正博訳 南江堂 12,000円＋			【 備 考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床病態学特論 Advanced Clinical Pathology	1	後期	2	コウノ タケユキ、マツウラ テツロウ、オザキ キョウカス 河野 武幸、松浦 哲郎、尾崎 清和
【 授業概要・目的 】 疾病の病因・病態・診断を統合的に理解することによって、薬剤師として能動的に薬物治療に参画できる資質が身につく。即ち、薬物による治療計画を立案するには、これらに関する最新情報に傾注し、情報を収集するとともに情報の確度を評価しておく必要がある。本特論では、膠原病・リウマチ・アレルギー内科、呼吸器内科、胆・肝・膵を含む消化器内科、血液内科、腎・泌尿器内科、皮膚科等で診療される疾病について、最新の基礎及び臨床情報を知り、それらを実地臨床に応用できる能力を身につけることを目的とする。				
【 到達目標 】 コースコンピテンス：薬物療法を総合的に評価し、患者への説明、処方設計の提案及び安全対策等の薬学的管理が実践できる。 ユニットコンピテンス：1) 本特論で取扱う疾患の病因と病態に関する理解を実地臨床に応用できる。 2) 本特論で取扱う疾患の最新の治療ガイドラインに関する理解を実地臨床に応用できる。				
【 指導方法と留意点 】 PBL (Problem-based learning)、TBL (Task-based learning) 等の能動的学習を行います。予め指示された内容について自己学習をしておいて下さい。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	関節リウマチ (河野)	内容：関節リウマチの病態理解と抗体製剤などの新規関節リウマチ治療薬 方法：PBL、教材：プリント		
2	気管支喘息 (河野)	内容：気管支喘息の病態理解と最新治療ガイドライン 方法：PBL、教材：プリント		
3	アトピー性皮膚炎 (河野)	内容：難治性アトピー性皮膚炎の病態理解と最新治療ガイドライン 方法：PBL、教材：プリント		
4	ウイルス性肝炎 (河野)	内容：C型肝炎の病態理解と最新治療コンセンサス 方法：PBL、教材：プリント		
5	1～4回目までの疾患に関するTBL (河野)	内容・方法：上記4疾患の治療計画立案に関するTBL 教材：プリント		
6	糖尿病網膜症 (松浦)	内容：糖尿病網膜症の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
7	加齢黄斑変性症および色素変性症 (松浦)	内容：加齢黄斑変性症および網膜色素変性症の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
8	歯周病 (松浦)	内容：歯周病の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
9	唾液腺炎 (松浦)	内容：シェーグレン症候群を含む唾液腺炎の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
10	6～9回目までの疾患に関するTBL (松浦)	内容・方法：上記4疾患の治療に関するTBL 教材：プリント		
11	非アルコール性脂肪肝炎 (尾崎)	内容：非アルコール性脂肪肝炎の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
12	頭頸部及び胃癌 (尾崎)	内容：頭頸部及び胃癌の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
13	多発神経障害 (尾崎)	内容：糖尿病性神経症を含む多発神経障害の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
14	慢性腎疾患 (尾崎)	内容：糖尿病性腎症を含む慢性腎疾患の病態病理の理解 方法：PBL、教材：プリント		
15	11～14回目までの疾患に関するTBL (尾崎)	内容・方法：上記4疾患の治療に関するTBL 教材：プリント		
【 評価基準 】 評価方法：コンピテンスレベルをknows howレベル (Miller GE, Acad Med, 65, 563-567, 1990) とし、到達度は、1) TBL時の観察記録 (50点) 及びTBL時のレポート (50点) で評価します。100点満点中60点以上を合格とします。				
【 教 材 等 】 プリント、内科学 (杉本恒明、矢崎義雄 編、朝倉書店、購入の必要はありません)、他		【 備 考 】 河野：病態医科学研究室 (1号館3階) 松浦、尾崎：病理学研究室 (6号館3階) 内容と順番を変更することがあります。		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床症候学特論 Advanced Clinical Symptomatology	1	前期	2	コサキ アツシ 小崎 篤志
【 授業概要・目的 】 症候学とは、疾病を病因や病態がとらえるのではなく、患者の示す様々な訴えや診察所見から疾病を定義・分類して意味づけを与える方法論である。本特論では、これらの方法論や情報等の学習を通して、症候から処方医薬品の処方提案やOTCによる治療について論じる。				
【 到達目標 】 (1) 身体の病的変化を理解するために、代表的な症候と臨床検査値に関する基本的知識を修得する。 (2) 各々の症候に対する鑑別疾患を列挙し、その病態生理および鑑別法を概説できる。 (3) 各々の疾患の薬物治療を学ぶ。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式およびセミナー形式で行う。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	臨床症候学 1	臨床診断法を概説する。		
2	臨床症候学 2	「ショック」「意識障害」「発熱・低体温」「浮腫」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
3	臨床症候学 3	「倦怠感」「皮膚掻痒」「貧血」「出血傾向」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
4	臨床症候学 4	「リンパ節腫脹」「レイノー症状」「頭痛」「痙攣」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
5	臨床症候学 5	「めまい」「運動麻痺」「運動失調」「歩行障害」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
6	臨床症候学 6	「腰痛」「関節症状」「胸痛」「不整脈」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
7	臨床症候学 7	「チアノーゼ」「咳嗽・喀痰・喀血」「呼吸困難」「腹痛」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
8	臨床症候学 8	「肥満」「やせ」「食欲不振」「嚥下障害」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
9	臨床症候学 9	「嘔気・嘔吐」「吐血・下血」「便秘」「下痢」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
10	臨床症候学 1 0	「腹部膨満」「腹水」「黄疸」「脱水」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
11	臨床症候学 1 1	「排尿異常」「尿量異常」「尿所見異常」「睡眠障害」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
12	臨床症候学 1 2	「視力障害」「難聴」「耳鳴」「味覚障害」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
13	臨床症候学 1 3	「嗅覚障害」「嗝声」「しびれ」の病態生理、鑑別法および各々の疾患の薬物治療を学ぶ。		
14	臨床症候学 1 4	病理病態論		
15	臨床症候学 1 5	まとめ		
【 評価基準 】 受講態度および到達度を課題発表などで総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床薬理学特論 Advanced Clinical Pharmacology	1	前期	2	オギタ キヨカズ、クラモト ノブユキ、ヨネヤマ マサリ 荻田 喜代一、倉本 展行、米山 雅紀
【 授業概要・目的 】 本特論では、薬理学の原理を踏まえて、臨床における薬物の理論と実際について論じる。患者毎の最適な薬物の選択、投与方法・投与量・投与間隔など投与計画を策定することにより最大の薬物有効性及び最小の副作用をもたらす情報を収集して体系化・理論化する。本特論では、①ヒトを対象とした人間薬理学、②臨床における薬物の有効性・安全性を評価する臨床薬物評価などを中心に論じる。				
【 到達目標 】 臨床の場で汎用されている医薬品の最新情報を収集し、その医薬品の適切な適用法について習得する。				
【 指導方法と留意点 】 学生自身が課題を見つけて、その課題を解決することに重点をおいた指導を行う。また、プレゼンテーション法の指導も行う。英語でのプレゼンテーションにも挑戦していただきます。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	新薬について (荻田)	2012年に認可された新規医薬品について概説する。		
2	新薬の基礎研究、臨床研究、臨床適用について (荻田)	2012年に認可された新規医薬品の有効性・安全性に関する基礎研究および臨床研究について調査・理解する。		
3	新薬の基礎研究、臨床研究、臨床適用について (荻田)	2012年に認可された新規医薬品の有効性・安全性に関する基礎研究および臨床研究について調査・理解する。		
4	新薬の基礎研究、臨床研究、臨床適用について (荻田)	2012年に認可された新規医薬品の有効性・安全性に関する基礎研究および臨床研究について調査・理解する。		
5	新薬の基礎研究、臨床研究、臨床適用について (荻田)	2012年に認可された新規医薬品の有効性・安全性に関する基礎研究および臨床研究について調査・理解する。		
6	骨粗鬆症治療薬 (米山)	骨粗鬆症治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
7	下部尿路機能障害治療薬 (米山)	下部尿路機能障害治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
8	甲状腺機能異常治療薬 (米山)	甲状腺機能異常治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
9	心房粗細動治療薬 (米山)	心房粗細動治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
10	炎症性腸症候群治療薬 (米山)	炎症性腸症候群治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
11	緑内障治療薬 (倉本)	緑内障治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
12	肺がんの分子標的治療薬 (倉本)	肺がんの分子標的治療薬の臨床適応の実際について学習する。		
13	小児用ワクチン (倉本)	小児用ワクチンの臨床適応の実際について学習する。		
14	英語による研究発表法 (倉本)	英語により各自の研究成果を発表する。		
15	英語による研究発表法 (倉本)	英語により各自の研究成果を発表する。		
【 評価基準 】 課題到達度 (50%)、筆記試験 (50%)。60%で合格とする。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
薬物療法学特論 Advanced Drug Therapeutics	1	前期	2	マエタ サダアキ、ヨシオカ ヤスヒロ 前田 定秋、吉岡 靖啓
【 授業概要・目的 】 本特論では、解剖学、生理学、薬理学及び薬物治療学の基礎知識をもとに、実際に臨床現場において実施されている各種疾患に対する薬物療法とその問題点について論じる。薬の有効性と安全性を確保しつつ、医薬品の適正使用を実施するための知識と技能並びに緩和医療に必要な薬物療法について論じるとともに、緩和ケアに必要なコミュニケーションスキルを身につけさせる。				
【 到達目標 】 各種疾患に対する最新の薬物療法を理解し、その問題点について考察することが出来る。				
【 指導方法と留意点 】 各テーマについて自習後、セミナー形式で行う。必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	循環器疾患（1）	循環器疾患の薬物療法（前田）		
2	循環器疾患（2）	循環器疾患の薬物療法（前田）		
3	消化器疾患（1）	消化器疾患の薬物療法（前田）		
4	消化器疾患（2）	消化器疾患の薬物療法（前田）		
5	悪性腫瘍（1）	悪性腫瘍の薬物療法（前田）		
6	悪性腫瘍（2）	悪性腫瘍の薬物療法（前田）		
7	緩和ケア（1）	緩和ケアにおける薬物療法（前田）		
8	緩和ケア（2）	緩和ケアにおける薬物療法（前田）		
9	腎疾患（1）	腎疾患の薬物療法（吉岡）		
10	腎疾患（2）	腎疾患の薬物療法（吉岡）		
11	血液疾患（1）	血液疾患の薬物療法（吉岡）		
12	血液疾患（2）	血液疾患の薬物療法（吉岡）		
13	内分泌疾患（1）	内分泌疾患の薬物療法（吉岡）		
14	内分泌疾患（2）	内分泌疾患の薬物療法（吉岡）		
15	まとめ	上記トピックについてのレポートを作成する。（吉岡）		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度より総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント、スライド等			【 備 考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
医薬品管理学特論 Advanced Clinical Drug Management	1	前期	2	シヨウ マコト 首藤 誠
【 授業概要・目的 】 医療現場において、医薬品の正確かつ円滑な供給や医薬品の適正使用は薬物治療及びリスクマネジメントの観点からきわめて重要な課題である。本特論では、有効な薬物治療や医療過誤の回避などに必要な医薬品管理について実例を通して論じる。また、医療の更なる向上を目指した医薬品管理や医薬品情報管理について考察させる。				
【 到達目標 】 医薬品の適正使用・リスクマネジメントのための情報収集と情報の精査ができる。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式、グループワーク及びセミナー形式で行うので、出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	医薬品情報概論	医薬品情報について概説		
2	医療現場における医薬品情報と評価	医薬品情報の収集と評価		
3	医療現場における医薬品情報と評価	医薬品情報の収集と評価		
4	医薬品情報とリスクマネジメント	総論		
5	医薬品情報とリスクマネジメント	薬剤関連業務の安全と効率化		
6	医薬品情報とリスクマネジメント	薬剤関連業務の安全と効率化		
7	E B Mの導入	シナリオ1 症例に対する薬物治療の選択		
8	E B Mの導入	シナリオ1 症例に対する薬物治療の選択		
9	E B Mの導入	シナリオ1 症例に対する薬物治療の選択		
10	E B Mの実践1	シナリオ2 症例に対する薬物治療の選択（予後）		
11	E B Mの実践1	シナリオ2 症例に対する薬物治療の選択（予後）		
12	E B Mの実践1	シナリオ2 症例に対する薬物治療の選択（予後）		
13	E B Mの実践2	シナリオ3 症例に対する薬物治療の選択（副作用）		
14	E B Mの実践2	シナリオ3 症例に対する薬物治療の選択（副作用）		
15	E B Mの実践2	シナリオ3 症例に対する薬物治療の選択（副作用）		
【 評価基準 】 受講態度と課題到達度で評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床漢方医療薬学特論 Advanced Kampo Pharmacy	1	後期	2	ヤベ タケン 矢部 武士
【 授業概要・目的 】 西洋薬(新薬)での治療が困難な種々の疾患に対して、漢方薬が一定の治療効果を示す場合があり、その有用性から現代医療の臨床現場で今なお多用されている。本特論では、漢方医学の基本的概念について理解を深めるとともに、現在汎用されている漢方処方による治療の実際について学習させる。また、漢方処方の治療メカニズムについて学習し、漢方薬を用いた新たな疾患治療の可能性についても考察させる。				
【 到達目標 】 漢方処方の有する作用、作用機序及び薬効成分の解明に関する研究方法を総合的に理解する。また現代医療における漢方医学の現状や可能性について理解し、考察することができる。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式及びセミナー形式で行うので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	漢方医学総論(1)	漢方医学の歴史、特徴、および現代医療における現状について		
2	漢方医学総論(2)	同上		
3	漢方医学総論(3)	同上		
4	漢方医学総論(4)	同上		
5	漢方医学総論(5)	同上		
6	漢方医学総論(6)	同上		
7	漢方薬の作用メカニズム(免疫系など)	喘息、アトピー性疾患への応用		
8	漢方薬の作用メカニズム(癌など)	抗癌剤の副作用軽減・消化器系疾患への応用		
9	漢方薬の作用メカニズム(内分泌系など)	更年期障害への応用		
10	漢方薬の作用メカニズム(循環器疾患)	循環器疾患への応用		
11	漢方薬の作用メカニズム(神経変性疾患)	アルツハイマー病への応用など		
12	漢方薬の作用メカニズム(精神疾患)	うつ・不安への応用		
13	漢方薬の作用メカニズム(その他)	新薬との併用効果など		
14	漢方薬のEBM・副作用	漢方医学におけるEBMの必要性、及び間質性疾患などの副作用について		
15	まとめ	上記トピックについてのレポートを作成する。		
【 評価基準 】 講義での質疑応答を含めた受講態度、課題・レポートの内容、提出状況などをみて総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリントなど		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
精神医療薬学特論 Advanced Clinical Pharmacy in Mental Health	1	後期	2	オギタキヨカズ、クラモトノブキ 荻田 喜代一、倉本 展行
【 授業概要・目的 】 精神科領域において求められる薬剤師の専門性とは、精神疾患、向精神薬、精神保健福祉などに関する知識とその知識を臨床薬剤師業務に反映する技術である。本特論では、精神科領域の薬剤師の専門性を理解するために、精神科医療全体を理解したうえで、向精神薬等による適切な薬物治療を支援するための専門的な技術を論じる。さらに、精神科チーム医療における処方管理責任者としての薬剤師となるために、精神科領域の医療スタッフを交えたより専門性の高い精神科薬物療法について論じる。				
【 到達目標 】 臨床の場で汎用されている神経精神科領域の医薬品の最新情報を収集し、その医薬品の適切な適用法について習得する。				
【 指導方法と留意点 】 学生自身が課題を見つけて、その課題を解決することに重点をおいた指導を行う。また、プレゼンテーション法の指導も行う。英語でのプレゼンテーションにも挑戦していただきます。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	脳の解剖と機能（倉本）	脳の解剖と機能について学習する。		
2	脳の機能と精神（倉本）	精神活動に関わる脳の機能について学習する。		
3	脳の機能と精神（倉本）	精神活動に関わる脳の機能について学習する。		
4	統合失調症、統合失調症型障害および妄想型障害（荻田）	統合失調症、統合失調症型障害および妄想型障害の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
5	うつ病（荻田）	うつ病の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
6	神経症性障害（荻田）	神経症性障害の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
7	ストレス関連障害および身体表現性障害（荻田）	ストレス関連障害および身体表現性障害の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
8	器質性障害（荻田）	器質性障害の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
9	パーキンソン病（荻田）	パーキンソン病の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
10	パーキンソン病（荻田）	パーキンソン病の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
11	アルツハイマー型認知症（荻田）	アルツハイマー型認知症の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
12	脳血管障害型認知症（荻田）	脳血管障害型認知症の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
13	脳血管障害型認知症（荻田）	脳血管障害型認知症の治療・対応に関する最新情報を調査・学習する。		
14	英語による研究発表法（倉本）	英語により各自の研究成果を発表する。		
15	英語による研究発表法（倉本）	英語により各自の研究成果を発表する。		
【 評価基準 】 課題到達度（50%）、筆記試験（50%）。60%で合格とする。				
プリント等		【 備考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床薬学演習 Clinical Pharmacy Seminar	1	通年	6	マエダ サタアキ 前田 定秋
【 授業（指導）概要・目的 】 医療現場の高度な薬物療法に対応できる薬剤師あるいは高度な薬物療法を研究・実践できる薬剤師となるために、連携医療機関・薬剤部での薬物治療カンファレンス等による実践的な演習を実施する。また、連携医療機関での感染対策チームや緩和医療チームでのカンファレンスでの短期演習も必要に応じて実施する。				
【 到達目標 】 医療現場での高度な薬物療法に対応できる知識・技能を修得し、その薬物療法を実践できる。				
【 指導方法と留意点 】 演習指導担当教員と連携医療機関の担当者との協議により、教育効果の高い演習計画を策定後、両担当者が連携を密にとりながら個別指導する。				
【 授業（指導）計画 】 ①演習課題についての情報収集の方法を指導する。 ②演習課題を実施するにあたっての技術を指導する。 ③演習成果の正確な解析法を指導する。 ④演習成果に対する考察について指導する。 ⑤学術論文を熟読し、その内容について議論する。 ⑥演習レポートの作成法を指導する。				
【 評価基準 】 演習への取り組み態度および課題到達度より総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 学術論文等			【 備考 】 アサガワ トシフミ、オキタ キヨカズ、オカカ マサト、コノ タケユキ、秋澤 俊史、荻田 喜代一、大塚 正人、河野 武幸、コサキ アツシ、ヤマハ タケシ、クラモト ノブユキ、シムロウ マコト、マツウラ テツロウ、小崎 篤志、矢部 武士、倉本 展行、首藤 誠、松浦 哲郎	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
公衆衛生学特論 Advanced Public Health Sciences	1	後期	2	ウエノ ヒシ 上野 仁
【 授業概要・目的 】 本特論では、予防医学の概念を踏まえ、薬学領域における疾病予防のための高度な理論と実践について理解し、疫学方法論と実践方法、データ処理にかかる統計学及び疫学事例をもとに疫学研究手法を習得する。本特論を通じて、ストレスの生理学、抗酸化酵素と抗酸化物質、ならびにそれらと老化や疾病との関わりなどについて概説し、疾病予防に必要な高度な知識や情報を収集することができる。				
【 到達目標 】 最新の公衆衛生学の実際の情報を理解して、考察することができる。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式およびセミナー形式で行うので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	公衆衛生学における疾病予防の概念	疾病予防の概念と疫学研究について概説する。		
2	必須元素と疾病予防(I)	必須元素の生理作用 (I) について概説する。		
3	必須元素と疾病予防(II)	必須元素の生理作用 (II) について概説する。		
4	必須元素と疾病予防(III)	必須元素と免疫応答について概説する。		
5	必須元素と疾病予防(IV)	必須元素と酸化ストレスおよび生活習慣病予防について概説する。		
6	必須元素と疾病予防(V)	必須元素の摂取基準の意義とその設定の考え方について調査・学習する。		
7	必須元素と疾病予防(VI)	必須元素の摂取基準の意義とその設定の考え方について調査・学習する。		
8	必須元素と疾病予防(VII)	必須元素の摂取基準の意義とその設定の考え方について調査・学習する。		
9	必須元素と疾病予防(VIII)	必須元素と酸化ストレスおよび生活習慣病予防について調査・学習する。		
10	薬学研究における疫学的手法(I)	疫学の基礎、統計的手法について概説する。		
11	薬学研究における疫学的手法(II)	疫学研究の方法論と問題点について調査・学習する。		
12	薬学研究における疫学的手法(III)	疫学研究の方法論と問題点について調査・学習する。		
13	薬学研究における疫学的手法(IV)	薬学分野における疫学研究の応用と実践について調査・学習する。		
14	薬学研究における疫学的手法(V)	薬学分野における疫学研究の応用と実践について調査・学習する。		
15	薬学研究における疫学的手法(VI)	薬学分野における疫学研究の応用と実践について調査・学習する。		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度をレポートなどで総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
食品安全学特論 Advanced Food Safety Sciences	1	前期	2	オオタソウイチ 太田 壮一
【 授業概要・目的 】 本特論では、予防医学の概念を踏まえ、食品の安全性に関する理論と実際について論じる。内容としては、国（内閣府）設置の食品安全委員会等で問題視されている食品中の種々の健康有害因子に関する最新情報の収集とその理解・対策法等について学習する。また、高齢化社会を迎えて、益々増加することが予測される服用薬物と健康食品・サプリメントとの併用による健康影響等の理論と実際についても学習する。				
【 到達目標 】 食品の安全性に関する最新かつ高度な情報を理解して、考察することができる。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式及びセミナー形式で行うので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	食品中の健康有害因子の理解と実際（1）	有害化学物質（農薬・食品添加物）・講義		
2	食品中の健康有害因子の理解と実際（2）	有害化学物質（環境汚染物質）・講義		
3	食品中の健康有害因子の理解と実際（3）	食物アレルギー及び遺伝子組換え食品・講義		
4	食品中の健康有害因子の理解と実際（4）	BSE及び遺伝子組み換え食品及び食中毒・講義		
5	食品中の健康有害因子の理解と実際（5）	放射性物質・講義		
6	健康食品・サプリメントの理解と実際（1）	保健機能食品（1）・講義		
7	健康食品・サプリメントの理解と実際（2）	保健機能食品（2）・講義		
8	健康食品・サプリメントの理解と実際（3）	特別用途食品・講義		
9	健康食品・サプリメントの理解と実際（4）	健康食品と服用医薬品との相互作用と問題点（1）・講義		
10	健康食品・サプリメントの理解と実際（5）	健康食品と服用医薬品との相互作用と問題点（2）・講義		
11	健康食品・サプリメントの理解と実際（6）	健康食品と服用医薬品との相互作用と問題点（3）・講義		
12	予防医学的観点から見た食品摂取の意義と問題点（1）	左記の授業テーマに関して、各自が自由に調査活動を行い、重要点を整理する・自由課題研究		
13	予防医学的観点から見た食品摂取の意義と問題点（2）	左記の授業テーマに関して、各自が自由に調査活動を行い、重要点を整理する・自由課題研究		
14	予防医学的観点から見た食品摂取の意義と問題点（3）	左記の授業テーマに関して、各自が自由に調査活動を行い、重要点を整理する・自由課題研究		
15	自由課題の成果発表	各自が調査した自由課題の研究内容について、発表会を行うと共に、その内容について相互討論を実施する・自由課題研究		
【 評価基準 】 成績評価は、評価点を100点満点とし、60点以上で合格とする。評価内容は受講態度（50%）及び課題発表内容・レポート（50%）で総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備 考 】 太田：1号館5階（環境保健学研究室） TEL 072-866-3120		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
感染予防医療薬学特論 Advanced Clinical Pharmacy in Infection Control	1	前期	2	タカマツ ヒロム 高松 宏治
【 授業概要・目的 】 本特論では、感染症学及び微生物学の原理を踏まえて公衆衛生及び臨床における感染症の予防と医療の理論と実際について論じる。また、遺伝子レベル・分子レベルからみたヒトと病原微生物の関わりについて論じる。さらに、病原体の検出・防除や、感染症の予防・治療に用いる薬剤やワクチンの最先端について論じる。				
【 到達目標 】 最新の細胞生物学的に基づいて感染症を理解し、治療法や予防法について考察することができる。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式及びセミナー形式で行うので、必ず出席すること。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	細菌の病原因子	宿主生物に対する細菌の定着因子・侵入因子		
2	同上	細菌の細胞内寄生機構と免疫回避機構		
3	細菌の毒素	細菌が産生する外毒素の種類と生理活性		
4	同上	細菌が産生する内毒素の特徴と生理活性		
5	細菌と感染のメカニズム	大腸菌やコレラ菌などの代表的なグラム陰性菌による感染症		
6	同上	ブドウ球菌や結核菌などの代表的なグラム陽性菌による感染症		
7	ウイルスの感染・増殖機構	宿主細胞に対するウイルスの吸着因子・侵入因子		
8	同上	宿主細胞内におけるウイルスの増殖機構と宿主のウイルス増殖抑制機構		
9	ウイルスによる細胞・組織傷害機構	ウイルス感染に伴う細胞の形態変化・機能障害		
10	同上	ウイルス感染に伴う免疫応答による細胞傷害		
11	ウイルスと感染のメカニズム	B型肝炎ウイルスなどの代表的なDNAウイルスによる感染症		
12	同上	ヒト免疫不全ウイルスなどの代表的なRNAウイルスによる感染症		
13	病原体検出法の最先端	分子生物学的・細胞生物学的手法に基づいた最新の病原体検出法		
14	ワクチンの最先端	遺伝学的・分子生物学的手法に基づいた最新のワクチン開発		
15	まとめ	上記トピックスについてのレポートを作成する		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度をレポートにより評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
健康薬学演習 Health Pharmacy Seminar	1	通年	6	ウエノヒシ、オタツウ 上野 仁、太田 壮一
【 授業（指導）概要・目的 】 本演習では、連携医療機関での感染対策チーム（ICT）や栄養サポートチーム（NST）等への参加を通して、医療現場での衛生管理の実際を深めさせる。また、医薬品等の副作用に関する疫学調査の実例を通して、健康薬学分野の理解を深めると共に、同分野の研究手法を修得させる。				
【 到達目標 】 医療現場での衛生管理や医薬品等の副作用の疫学調査の実際を理解できる。				
【 指導方法と留意点 】 演習指導担当教員と連携医療機関の担当者との緊密な協議により、教育効果が高い演習計画を策定後、本演習を通して両者が緊密に連携を取りながら学生を個別指導する。				
【 授業（指導）計画 】 ①演習課題を達成するための計画の策定法について指導する。 ②演習課題に対する予備知識や手技を指導する。 ③演習成果に対する正確な解析法を指導する。 ④演習成果に対する考察について指導する。 ⑤本演習と関連深い学術論文を熟読して、その研究成果について議論する。 ⑥演習レポートの作成法を指導する。				
【 評価基準 】 成績評価は、評価点を100点満点とし、60点以上で合格とする。評価内容は演習レポート（50%）及び演習への取り組み姿勢（50%）で総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等			【 備考 】 上野：1号館5階（公衆衛生学研究室）TEL 072-866-3123 太田：1号館5階（環境保健学研究室）TEL 072-866-3120	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
医薬品化学特論 Advanced Medicinal Chemistry	1	後期	2	アンドウアキラ、オモテマサアキ 安藤 章、表 雅章
【 授業概要・目的 】 本特論では、有機化学の知識をもとに、現在臨床で用いられている医薬品をはじめとした多様で複雑な分子の構造と合成及びその合成法に関する反応機構などについて論じるとともに、それら医薬品の構造解析を含む化学構造に基づいた構造活性相関などについて論じる。（8回：安藤担当，7回：表担当）				
【 到達目標 】 ひとつの有機合成反応をいろいろな視点から考察することで、大学院生に必要な考える力を養う。				
【 指導方法と留意点 】 プリントを用い、講義形式で行う。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	医薬品合成に関連する反応について (安藤)	医薬品の合成における重要な反応について説明する。		
2	医薬品合成に関連する反応について (安藤)	同上		
3	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	高血圧症の治療薬の作用と化学構造および合成法について説明する。		
4	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	同上		
5	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	脂質異常症の治療薬の作用と化学構造および合成法について説明する。		
6	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	糖尿病の治療薬の作用と化学構造および合成法について説明する。		
7	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	動脈硬化症の治療薬の作用と化学構造および合成法について説明する。		
8	代表的な疾患と主な治療薬について (安藤)	消化性潰瘍の治療薬の作用と化学構造および合成法について説明する。		
9	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	気管支拡張薬の合成法について説明する。		
10	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	同上		
11	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	気管支拡張薬の薬理作用について説明する。		
12	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	同上		
13	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	気管支拡張薬の製剤方法について説明する。		
14	代表的な疾患と主な治療薬について (表)	気管支拡張薬の構造活性相関について説明する。		
15	まとめ (表)	-		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度より総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント等		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
製剤学特論 Advanced Pharmaceutical Technology	1	前期	2	ハシモト ナオミ、サカマ シンジ 橋本 直文、佐久間 信至
【 授業概要・目的 】 本特論では、物理化学、物理薬剤学、生物薬剤学の基礎知識をもとに、医薬品の開発においてどのような製剤学的な取り組みが行われてきたか、過去から現在までの移り変わりを紹介する。また、医薬品の開発に立ちはだかる最近の問題に対して、どのような製剤学的解決策が取られようとしているのか、日欧米製薬企業及びベンチャー企業の最新情報を交えて教授する。				
【 到達目標 】 ドラッグデリバリーシステム（DDS）を含めた最新の製剤学の実際の情報を理解して、考察することができる				
【 指導方法と留意点 】 講義形式及びセミナー形式で行うので、必ず出席すること				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	医薬品開発と製剤設計（橋本）	医薬品開発とそこの中での製剤設計について		
2	製剤の概要（佐久間）	各種製剤の概要について		
3	同上（佐久間）	同上		
4	経口製剤の設計と評価（橋本）	経口製剤の設計と評価について		
5	同上（橋本）	同上		
6	注射剤の設計と評価（橋本）	注射剤の設計と評価について		
7	同上（橋本）	同上		
8	軟膏剤等その他の製剤の設計と評価（橋本）	軟膏剤等その他の製剤の設計と評価について		
9	同上（橋本）	同上		
10	DDSとは何か（佐久間）	DDSの目的や概念について		
11	経口投与型DDSの概要（佐久間）	消化管の特性から経口投与型DDSについて		
12	注射投与型DDSの概要（佐久間）	体内動態の特性から注射投与型DDSについて		
13	経皮投与型DDSの概要（佐久間）	皮膚の特性から経皮投与型DDSについて		
14	経肺投与型DDSの概要（佐久間）	肺の特性から経肺投与型DDSについて		
15	新しい医療とDDS（佐久間）	新しい医療とそこの中でのDDSについて		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度をレポートなどで総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント、スライド等		【 備 考 】		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
薬物動態学特論 Advanced Pharmacokinetics	1	前期	2	ヤマシタ シンジ、イマイキエ 山下 伸二、今井 公江
【 授業概要・目的 】 本特論では、薬剤学及び薬物動態学の原理を学習するとともに、医薬品開発における薬物動態学の意義や利用法等について実例を通して論じる。また、個別化医療及び薬物間相互作用等の観点から、医薬品の適正使用における薬物動態学の意義や重要性について論じる。				
【 到達目標 】 薬物動態学の理論を理解し、医薬品開発や臨床の現場に応用するための方法を考察することが出来る。				
【 指導方法と留意点 】 講義形式およびセミナー形式で行い、必要に応じて担当教官が個別に指導する。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	医薬品開発における動態研究 (山下)	企業における動態研究の現状と問題点		
2	同上	探索的臨床試験について		
3	同上	新たな医薬品開発ストラテジー		
4	体内動態予測法 (山下)	In vitroデータからの予測について		
5	同上	動物実験データからの予測について		
6	薬物血中濃度推移のシミュレーション (山下)	コンピューターを用いたシミュレーションの実施 (線形モデル)		
7	同上	コンピューターを用いたシミュレーションの実施 (非線形モデル)		
8	同上	薬物相互作用のシミュレーション		
9	臨床現場における薬物動態学 (今井)	医薬品の臨床使用における動態学の重要性について		
10	同上	添付文書の動態パラメータについて		
11	医薬品の適正使用における薬物動態学 (今井)	薬物間相互作用の解析		
12	同上	高齢者の薬物動態について		
13	同上	疾病による薬物動態の変動について		
14	個別化医療における薬物動態学 (今井)	ポピュレーション動態解析法		
15	同上	TDMについて		
【 評価基準 】 受講態度および課題到達度をレポートなどで総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 プリント 参考書 (「新しい図解薬剤学」 杉林堅次・山下伸二他著 南山堂、「生物薬剤学」 林正弘・谷川原祐介編 南江堂)		【 備考 】 山下担当 (1-8) 今井担当 (9-15)		

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
臨床統計学特論 Advanced Clinical Statistics	1	後期	2	コホリエイコ 小堀 栄子
【 授業概要・目的 】 本特論では、医薬品の臨床開発に必須である臨床統計の実際を習得するために、臨床研究の実例に基づき、臨床統計の理論と実際について教授する。				
【 到達目標 】 基本的な統計手法を理解し、論文解釈に応用できる。				
【 指導方法と留意点 】 講義を中心に行う。希望があれば、統計解析ソフトを用いた解析のデモンストレーションを行う。				
【 授業計画 】				
回数	テーマ	内容・方法 等		
1	統計の考え方	母集団、標本、サンプリング、推論、データの種類		
2	データの要約	平均値、中央値、四分位、分散、標準偏差、標準誤差、正規分布、度数分布、ヒストグラム		
3	効果の指標	割合・比・率、罹患率、有病率、相対リスク、寄与リスク		
4	研究デザインと解析 I	介入研究、ランダム割り付け、コホート研究 (1)		
5	研究デザインと解析 II	コホート研究 (2)、症例対照研究、横断研究		
6	バイアス	誤差、バイアス、交絡と調整、標準化		
7	推定と検定	統計学的推論、点推定、区間推定		
8	サンプルサイズ	サンプルサイズの計算		
9	1標本の検定	1標本と母集団の比較		
10	2群の比較	独立2群の比較、対応2群の比較		
11	分散分析	独立多群の比較、対応多群の比較		
12	相関と回帰	相関係数、回帰係数、直線回帰		
13	多変量解析 I	重回帰分析		
14	多変量解析 II	多重ロジスティック回帰分析		
15	多変量解析 III	比例ハザード分析		
【 評価基準 】 定期試験。				
【 教 材 等 】 資料を配付する。参考書は随時紹介する。			【 備考 】	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
医薬品開発学演習 Drug Development Seminar	1	通年	6	ヤマシタ シンジ 山下 伸二
【 授業（指導）概要・目的 】 本演習では、医薬品開発プロセスに関する基本的な知識を踏まえて、医薬品開発の実際について実例に沿って演習を行う。また、連携医療機関での治験審査委員会への参加等を介して、医療現場での治験プロセスについて演習を行う。このような演習を通して医薬品開発プロセスの理解を深めさせる。				
【 到達目標 】 医薬品開発において、研究計画の策定、実験方法の確立、実験結果の解析と考察などができる。また、その研究成果を論文として発表できる。				
【 指導方法と留意点 】 各専攻分野毎に、実験や論文読解をとおして、研究指導担当教員が個別に指導する。				
【 授業（指導）計画 】 ① 各専攻分野の研究課題に対する実験計画の策定を指導する。 ② 各専攻分野の研究課題に対する実験手技を指導する。 ③ 実験結果に関して正確な解析法を指導する。 ④ 実験結果の考察について指導する。 ⑤ 学術論文を熟読して、その研究成果について議論する。 ⑥ 論文の作成法を指導する。				
【 評価基準 】 演習への取り組み態度および課題到達度より総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 各専攻分野の学術論文			【 備考 】 コホリ エイコ、サカマ シンジ、ハシモト ナオミ、アノドリ アキラ 小堀 栄子、佐久間 信至、橋本 直文、安藤 章	

科 目 名	配当年次	開講期	単位数	担 当 者
医療薬学特別研究 Clinical Pharmacy Seminar	1～4	通年	12	オギタ キヨカズ 荻田 喜代一
【 授業（指導）概要・目的 】 学生自らが医療現場での臨床的課題を見出し、その課題について、研究計画の策定、研究方法の開発、研究成果の解析とまとめ、学術論文の作成を実施する。これにより、研究能力の全般を修得させる。また、それぞれの薬学研究領域において、指導教員の指導のもとテーマを設定する。4年間にわたって実験・実習を繰り返し、データ解析を行う。最終的には、自立して医療薬学研究ができるようになることを目指す。				
【 到達目標 】 各専攻分野において、研究計画の策定、実験方法の確立、実験結果の解析と考察などができる。また、その研究成果を論文として発表できる。				
【 指導方法と留意点 】 各専攻分野ごとに実験や論文読解を通して、研究指導担当教員が個別に指導する。				
【 授業（指導）計画 】 ①各専攻分野の研究課題に対する実験計画の策定を指導する。 ②各専攻分野の研究課題に対する実験手技を指導する。 ③実験結果に関して正確な解析法を指導する。 ④実験結果の考察をについて指導する。 ⑤学術論文を熟読して、その研究成果について議論する。 ⑥論文の作成法を指導する。				
【 評価基準 】 研究態度および課題到達度により総合的に評価する。				
【 教 材 等 】 各専攻分野の学術論文			【 備考 】 アキザリ トシマ、アンドウ アキラ、ウエノ ヒロシ、オオタ ヲウイチ、 秋澤 俊史、安藤 章、上野 仁、太田 壮一、 コウノ タカユキ、サカマ シンジ、ハイモト サオウジ、マエダ サダアキ 河野 武幸、佐久間 信至、橋本 直文、前田 定秋 ヤマシタ シンジ、クラトウ ノブユキ、シュウリ マコト、マツウラ テツロウ 山下 伸二、倉本 展行、首藤 誠、松浦 哲郎	

大学院シラバス

2013年4月

発行 常翔学園 摂南大学

枚方学舎 〒573-0101 大阪府枚方市長尾峠町45-1
電話 (072) 866-3100 【薬学研究科】

